

序論

秋のチャーチコンサートが終り、教会はいよいよクリスマスに備えていく季節になりました。今年を振り返るにはまだ少し早いかもしれませんが、今年、どのようなことが印象に残っているのでしょうか。

教会のことでいうと、今年5名の受洗者が与えられたことは、大きな大きな主の恵みだったなと私は感じています。今朝、週報をひらいて驚かれた方も多かったのではないのでしょうかね。

また、世の中ではイスラエルで戦争が始まってしまったことに大きな衝撃を受けました。今朝のみことばは、「互いに愛し合うこと」について語っていますが、その難しさをまざまざと見せつけられているような気がしています。

誰だって互いに愛し合いたい

11 互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。

11節のこのみことばについては、みなさんと3つのこと分かち合いたいと思いました。

①まず第一に、「互いに愛し合うべきである」ということは、誰もが認めることであるということです。誰だって、憎むより愛するのが良いと分かっています。誰だって、お互いに愛し合うことができるなら、それが一番いいと思っているんです。

それは理想論だと反論する人はいるかもしれませんが、それが理想であることは認めているわけです。人は、誰に教えられるともなく、「愛し合うこと」が善いことであることを、心の深いところで知っているのです。その思いや心を、「良心」と呼んでも良いでしょう。人が生まれながらに持っているその思いは、神さまが与えてくださっているものです。

ただ、それは分かっているけど、「愛したいと思っても愛せない」「愛し合いたい願ってもそれが難しい」という現実があることも事実です。私たちは、日ごろからニュースでそういう世界の現実を聞き、自分の身近なところで目にし、また自分自身のこととしてその困難を体験し、苦しんだことがあるのではないのでしょうか。

②11節のみことばから分かち合いたい第二の点は、まさにこのことに関係しています。すなわち、私たち「人間にとって、愛し合うことは難しい」ということです。ヨハネは、「互いに愛し合うべきである」と、誰もが正しいと認めることを言いつつ、わざわざ、さらに、「それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。」と念を押しています。初めから言われているに、またもう一度念を押さなければならぬのは、それが人にとって難しいことだからではないのでしょうか。それは、この世界が今も争いに満ちていることから分かります。悲しいことに、私たち人類の歴史は、戦争の歴史でもあります。今も憎しみの連鎖を、私たちは止めることができずにいます。

③そして、11節で述べておきたい、第三の点は、それでもみことばは、その「互いに愛し合う」ということを教えているということです。11節の言葉で言うなら、「初めから聞いている使信」です。「使信」という言葉は聞きなれない言葉ですね。辞書を引いてみますと「イエス・キリストおよび使徒たちの福音宣教の中核的内容」とありました。簡単に言えば「中心的なメッセージ」＝「伝えたい内容」ということです。

「互いに愛し合うべきである」ということは私たちの「良心」に刻み込まれているだけでなく、みことばが教えよう＝伝えようとしていることでもあるのです。しかも、はじめから伝えようとしていることなんですね。それだけ「互いに愛し合うということ」が、大切に、根本的なことであると言うことです。

以上、3つのことをお話してきました。「互いに愛し合うべきである」というのは、誰もが良いと認め

ていることです。しかしながら、それは人には為し遂げることができない困難なことでもあります。でも、聖書は「互いに愛し合うように」と繰り返し教えています。神様は私たちにできないことをお命じになられたのでしょうか？私たちはどうしたらいいのでしょうか？今日は、この問題について、これからお話ししていきたいと思います。

世の思い(カインの場合)

さて、この後、ヨハネは2人の人物を引き合いに出しています。一人はカイン、もう一人はイエスキリストです。カインは良くない例であり、反面教師として。イエスキリストは良い例として示されています。今日の説教題「世の思い、キリストの愛」は、この2人の対照的な例をもとに考えたものです。カインは「この世の思い」を代表するかのような人物です。そしてイエスキリストが示してくださったのは「愛」です。では、まず12節のカインからです。

12 カインのようになつてはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。

ここでは、創世記4章に記されている人類最初の殺人事件をもとに語られています。カインが弟のアベルを殺してしまった、痛ましい事件です。彼らは、人類の祖であるアダムとエバの息子たちです。人と人が互いに愛しあえない、悲惨な人類の歴史は、もう初期も初期のこの時点から始まっています。そして、今に至っています。

そんなに長いストーリーではないですから、ご存知の方も多いと思いますが、元になっている創世記4：1-8の記述を読みましょう。

1 人(アダム)は、その妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は、主によって一人の男子を得た」と言った。2 彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。3 しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来た。4 アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。主はアベルとそのささげ物に目を留められた。5 しかし、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。6 主はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。7 もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

カインは何故、弟を殺したのでしょうか。まず、「妬み」「嫉妬」を挙げる事ができるでしょう。神様は、アベルのささげた羊に目を留められましたが、カインがささげた大地の実りには目をとめられません。そのとき、カインは激しく怒りました。「自分が低く小さく見られた」、「不当な扱いを受けた」という思いがあったのかもしれませんが、プライドがズタズタにされました。カインはこの時、「顔を伏せた」と、御言葉は語っています。カインは、その怒りが正しいものではないと分かっていたんですね。

ヨハネは12節で、カインが自分の兄弟を殺した理由を「自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったから」と述べています。相手が悪いから殺したのではなく、相手が「正しかった」から、殺したのです。まったく筋が通っていません。自分よりも正しい者が赦せない。自分よりも良い者、すぐれた者が赦せない。自己中心的で、高慢な思いが潜んでいる。これが「世の思い」です。

正しいことをするなら、人々は認めてくれるだろうと、私たちは考えます。しかし、そうはならないことが多々あります。だから、ヨハネは13節で、13 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。と、語っています。

キリストの愛

ヨハネが挙げたもう一人の人は、イエス・キリストでした。14, 15 節はあとで触れようと思いますので、まずはヨハネがキリストについて何を語っているのかを見ることにしましょう。16 節です。

16 キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

カインは、弟の命を奪いました。弟アベルが正しいものであったにもかかわらずです。イエスさまは、それとは逆です。私たちのためにいのちを捨ててくださいました。私たちが神様の前に清く正しく歩む正しいものであったからでしょうか。それも違います。私たちが神を無視し、神に背を向けて歩んでいたときにです。神に背を向け、神から離れて、自由に自分勝手に生きていたときにです。聖書はそれを「罪」と呼んでいます。私たちが神の前に正しいものではないとき、すなわち罪人であったときに、イエスさまは、私たちのためにいのちを捨ててくださいました。

私たちは自分が無視され、小さく扱われれば、怒ります。カインのように、心の中に激しい怒りが渦巻きます。自分に敵対し、自分のいのちを脅かすような者がいれば、排除しようとするのではないのでしょうか。たとえ、相手の方が正しく、自分に非があったとしても関係ありません。自分のいのちのためならば、相手を排除する。それが「この世の思い」であり、この世に生まれ、この世の思いの中で育ってきた私たちもまた、そんな思いに従って歩んでいました。そんな私のために、キリストは死んでくださるということです。使徒パウロも同じことを語っています。(ローマ5：6－8)

それによって私たちに愛が分かったのです。と、ヨハネはつづけています。

神の愛がわかるとき、というのは人それぞれだと思います。私の場合は、子どもの頃に教会に通い始め、イエス様の話を聞いていたので、神さまが愛のお方であることや、イエスさまが自分の罪のために十字架に架かってくださったことは、いつということもなく何となく受け入れていましたが、それは教会学校などで教えられて頭で理解していたという状態だったとおもいます。それが、はじめて自分の事として、理解し、キリストの十字架の意味が腑に落ちたのは、イエス様の十字架の言葉が意味していることを深く受け取ったときでした。イエスさまは、十字架上で7つの言葉を残しています。その一つが、「わが神わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」です。

みなさんは、「神に見捨てられる」ということを、どれくらい真剣にうけとめていますか？「神に見捨てられた」と感じた経験はあるでしょうか？本当に深い悲しいや、絶望の経験をした方の中には、そのように感じたことがある方も居られるかもしれません。しかし、どんなに深い絶望の淵に落とされたとしても、ただお一人を除いては、本当に神に見捨てられたという経験をした方はおられません。私たちは、神の愛と恵みを失うことがどれほど恐ろしいことであるかということを知らず、それを軽く見えています。その恐ろしさは、私たちの想像を超えています。

キリストの十字架の死は、単なる肉体の「死」ではありません。想像を絶する苦痛が伴う、残虐で、そして壮絶な死ではありますが、その本当の厳しさ、悲惨さは、「神に見捨てられる」ということにあります。キリストが十字架で、私たちの代わりに裁きを受けたということの真髄は、イエス・キリストが私の代わりに「神に見捨てられた」というところにあります。神の愛と恵みと祝福の意味を、誰よりも知っておられるお方である神の御子イエス・キリストが、その祝福を取り去られ、誰よりも神と親しくしておられたお方が、私たちの身代わりに、その愛から断ち切られたのです。それは、「死」を意味します。

私は、イエスさまは神の御子であるのだから、どんなことでも成し遂げることができると思っていました。イエスさまにとって難し事なんてないと、どこかで考えていました。しかし、イエスさまが神に見捨

てられたということを真剣に受けとめたときに、イエスさまは最も大切なものを私のために手放し、犠牲にくださったのだと理解できました。

神から離れたところに、いのちはありません。聖書が教えている「永遠のいのち」とは、神さまとの親しい交わりに生きることです。イエスさまが、神に見捨てられることで私たちのために差し出し、犠牲にくださったのは、その永遠のいのちという何にもかえがたいものなのです。そして、このキリストの十字架の「死」によって、罪人であった私たちへのいのちの道をひらくことは、父なる神さまの御心なのでした。

なぜ、神様が、そんなことをされたのか、私にはまったく理解できません。私にそんな価値があるとは、とても思えませんし、イエス様がそんなに大きな犠牲を払ってくださる理由もぜんぜんわかりません。まったく釣り合いが取れていないと思いますし、こうして一応は説明していますが、筋だっただけ通っているといえるのだろうか、というのが正直な思いです。・・・が、しかし、みことばはハッキリと、神がなぜそのようなことをされたのかを私たちに教えてくれます。すなわち、神はそれほどまでに、私たち一人一人を、そしてあなたを愛しているからと、言うんです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。ヨハネ3:16

これが「神の愛」です。これが「キリストの愛」です。私たちは、イエス様が私たちのためにいのちを捨てて、まねいてくださるまで、この「愛」を知らずに、神を無視して生きていたのです。

具体的な行動によって愛を伝える

さて、ヨハネは、この神の愛が分かったなら、キリストと同じように、「私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべき」だと、16節の後半で続けています。

もちろん、イエス様が十字架で死なれたように、私たちも人のために死ななければいけないと言っているわけではありません。時代が時代なら、キリストのため、また兄弟のために殉教するということもあり得たでしょう。しかし今のところそのような召しを神様から受けている人は、ここにはいないでしょう。

ですから、私たちとしては、ここでヨハネが言っていることは、次のように理解するのが良いと思います。すなわち、「イエス様が私たちのためにいのちを捨てて愛を示してくださったように、そのように兄弟への愛を示しなさい」ということです。そうすると、「いのちを捨てる」というのは、兄弟たちを愛するために「自分という自我に死ぬこと」とか、「犠牲を払うことを厭わないこと」という意味になって来るでしょう。この後、読んでいこうと思っている17節、18節の内容も加味するなら、具体的な行いと真実をもって愛を示していくようにと勧められていると考えられます。

17 この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。

18 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。

ここでは、具体的に自分の持っているものや、できることを通して、人を愛していくこと、人に仕えていくことが語られています。特に、名前も知らないだれか遠くの人ではなくて、自分の兄弟という身近な者に対する「愛」が問題にされています。そういう身近な存在に具体的に愛を示していくことよりも、年末赤い羽根募金に寄付したり、ボランティアに参加して奉仕活動をする方が、気楽だったりしないでしょうか。それは、身近な兄弟に愛を示していく方が、より一層「真実」が試されるからだだと思います。ごまかしがきかないわけです。

そして、最初にお話ししたように、互いに愛し合っていくということはなかなか難しいことです。言葉

や口先だけではなく、行いと真実をもって愛していくことには、困難が伴うでしょう。では、私たちは兄弟を愛するために、どのようにしていけばよいのでしょうか。

私たちの愛ではなく、キリストの愛によって、愛していくということです。私たちの力によって愛するのではなく、神さまからいただいた愛によって、兄弟姉妹を愛していくのです。たしかに、私たちには難しいことかもしれません。しかし、キリストからいただいた永遠のいのちに生き、キリストによって与えられた御霊に励まされながら進んでいくときに、神の豊かな恵みの中で、愛を示していく道が開かれます。そこに主の御心があるからです。

私たちは死からいのちに移されている

そして更に、途中でとばした14節と15節のみことばから、「いのちと愛」の深い関係を見たいと思います。

14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。

15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません。

使われている表現がややこしいので、ストレートな言い方に改めるなら、「永遠のいのちに移された者は、兄弟を愛する者となり、兄弟を愛する者には、永遠のいのちがとどまる」ということになるでしょう。

ここで言われていることを整理すると、いのち(永遠のいのち)は愛することと、切っても切れない深い関係があるということです。神様から永遠のいのちをいただいているのに、冷たく愛に冷え切っているということはありません。また、独りよがりではない、真の愛があるところには、そこに人を生かすいのちがあるということです。

私たちが誰かを愛するには、私たちのうちに愛がなければなりません。愛といのちの深い関係を思うなら、私たちのうちに豊かな「いのち」がないならば、誰かを愛することはできないとも言えるでしょう。

そして、キリストを信じる私たちは、「死からいのちに移されて」います。永遠のいのちを与えられて、神の豊かな愛を注がれているということです。これは、私たちの力や業によるのことでなく、神様が計画され、イエス様がなし遂げ、聖霊によって私たちに保証されている、神の確かな御業です。

もしも、自分には愛がない、自分の愛は冷たく冷え切っていると感じられる方がおられたとしても、主イエスを信じて永遠のいのちをいただいているなら、神様に既にあなたに愛を与えてくださっています。その愛が熱く燃え上がるように祈りましょう。そして、キリストを信じ、永遠のいのちに生かされている者に、神様が必ず兄弟姉妹を愛する愛を与えてくださると信じてください。私たちに愛を与えるために、私たちの主であるイエス・キリストはいのちを捨てて、私たちにいのちを与えてくださいました。

互いに愛し合うことは、たしかに、私たちには難しいことかもしれません。しかし、キリストからいただいた永遠のいのちに生き、御霊に励まされながら進んでいくときに、神の豊かな恵みの中で、私たちの愛が増し加えられ、兄弟に愛を示していく道が開かれます。そこに主の御心があるからです。

お祈りしましょう